



東京学芸大学リポジトリ

Tokyo Gakugei University Repository

重要概念「ものの見方」の視点から考える平等と公平：教科等融合の視点で提案する道徳授業

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-04-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 浅井, 悦代, 橋本, みゆき, 野島, 淳司, 飯田, 光一郎, 鮫島, 朋美 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2309/00180037

重要概念「ものの見方」の視点から考える平等と公平

—教科等融合の視点で提案する道徳授業—

Considering Equality and Equity from the Standpoint of a Key Concept "Perspectives"

—Moral Education Proposed from a Viewpoint of Interdisciplinary Integration of Subjects—

「第2学年」グループ

国語科 浅井 悦代

保健体育科 橋本みゆき

数学科 野島 淳司

音楽科 飯田光一郎

理科 鮫島 朋美

要旨

道徳授業の協働設計にあたり、国際バカロレアの単元設計の枠組みを活用し、重要概念や探究の問いを設定することで概念理解を促す単元設計を行った。事実的な問いから議論の余地のある問い、さらに概念的な問いへと展開することにより、学習指導要領でも示される「考え、議論する道徳」授業を実践した。活発に議論する生徒の様子や振り返りの記述からも、平等と公平に対する多面的・多角的に考える姿勢が窺えた。

1章 はじめに

本校では、IBプログラムの導入により、各教科授業の単元設計において重要概念や文脈を設定し、実社会の状況を取り込み、教科を横断した授業展開が日々実践されている。今年度の2学年研究グループ(同一学年の授業を担当する異教科の教員で構成する授業研究を目的としたグループ)では、この単元設計の枠組みを道徳授業に適用する試みをした。

中学校では、2019(平成31)年度より「特別の教科 道徳」とし、道徳の教科化が始まった。道徳教育が「学校の教育活動全体を通じて行うもの」とあるという認識はこれまでと変わらないが、学習指導要領の変更において目指すべき方向性が明確になった。問題解決や体験的な学習なども取り入れ「考え、議論する道徳」を目指すこと、「何を知っているか」だけでなく「知っていることを使ってどのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか」の資質・能力にまで引き上げることを目指している。ⁱ

この道徳教育にIBプログラムの単元設計の枠組みを活用することを、本研究で提案する。具体的には、各教科学習におけるトピックから、「探究の問い」としてFactual(事実的な問い)→Debatable(議論の余地のある問い)→Conceptual(概念的な問い)を経て、重要概念の理解につなげる(図1参照)。教科の知識が概念に昇華されることを「学びの転移」として捉えるものである。IBプログラムにおいては、3つの「探究の問い」に順序性を定めていないが、道徳教育の特徴を捉えて本研究では順序を定めた。この枠組みにより、上記の道徳教育の目指すべき方向性を実現できるのではないかと考える。

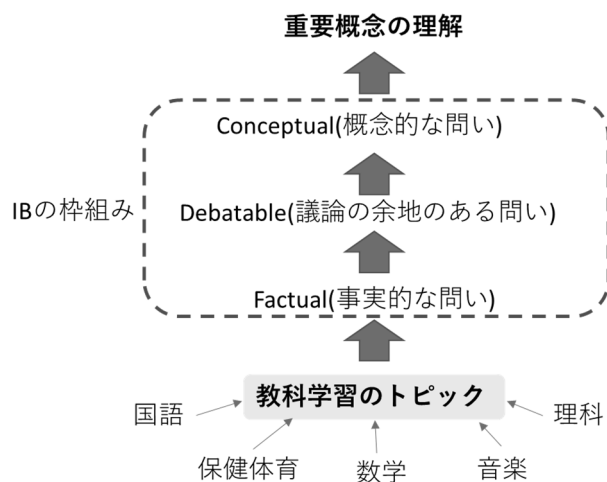


図1 単元設計の考え方

2章 授業研究について

1節 概要

本校の校内研究の一環として、同一学年の授業を担当する異教科の教員で研究グループを構成し、授業研究を行った。本研究における構成メンバーの担当教科は、国語、数学、理科、音楽、保健体育である。授業研究においては、教科等融合の視点で提案する道徳授業をテーマとし、道徳の内容項目C. 主として集団や社会との関わりに関する「公正・公平・社会正義」で、「正義と公正さを重んじ、誰に対しても公平に接し、差別や偏見のない社会の実現に努めること」を扱う単元を構成した。単元設計においては、IBの枠組みを活用した。IBプログラムの中等教育課程(Middle Years Programme, 以下MYP)ⁱⁱ⁾においては、カリキュラムの中で探究すべき16の重要概念を定めており、その1つに「ものの見方」がある。「ものの見方」は、状況、物、事実、考え、意見を観察するときの立ち位置であり、それぞれ個人や集団、文化、学問領域と関連づけられることがある。つまり、「ものの見方」によって、同じであるものが異なる。これは立ち位置の違いによるものである。私たちは社会の「公正・公平・社会正義」をどの立ち位置から捉えればよいのだろうか。この課題に、生徒と共に向かい合うための単元設計を授業研究の対象とした。

2節 単元設計

2-1. 単元の概要

本単元では、道徳の内容項目「公正・公平・社会正義」を扱う。この項目は、「正義と公平さを重んじ、誰に対しても公平に接し、差別や偏見のない社会の実現に努めること」をめざしている。中学生になると、社会の在り方についても目を向けはじめ、現実の社会がもつ矛盾や課題に気付きはじめる。一方で、自己中心的な考え方や行動をとったり、周囲の意見や考えに左右されたりすることも多い。中学2年生の発達段階に合った題材を各教科トピックから提供し、道徳的な扱いにつなげていく。

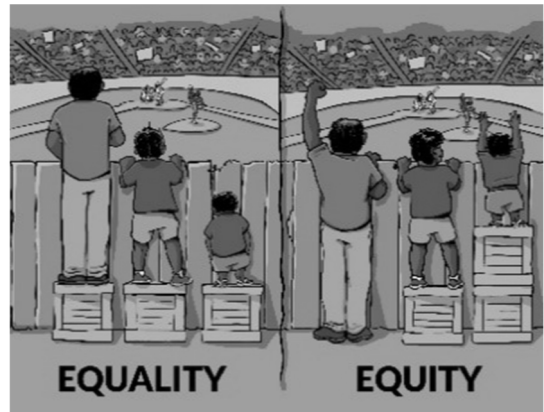


図2 平等(Equality)と公平(Equity)

「平等と公平」を分かりやすく比較したイラストとして、図2ⁱⁱⁱは有名であり社会的にも大きな反響を呼んでいる。本単元では、実社会に存在する「平等と公平」の事例から広く考え、現実の社会がもつ矛盾や課題に向き合う。次に焦点化されたテーマとして、クラス内リレーを楽しむための「平等と公平」を具体的に議論する。そして、最後に「平等と公平」の一般化を通じて概念理解へと導く。リレーにおけるルール作りとその実験における実感から、「平等と公平」について議論する展開が、中学2年生という発達段階に効果的に働くことを提案する。

2-2. 単元の構成

単元構成は以下の通りである。

表1 単元構成

	内容	探究の問い
1 時間目	<p>「公正・公平・社会正義」に関連する各教科からのトピック提示 (国語)身の回りの 広告と「ものの見方」 (数学) 投票の方法によって左右される選挙の結果 (理科) 高レベル放射性廃棄物の地層処分問題の行方 (音楽) 著作権の視点からみた音楽の公正な利用 (保健体育)リレーを楽しむためのルール 本単元においては、この後、保健体育のトピックをフォーカスし、具体的な議論へとつなげる。</p>	<p>【事実的な問い】 (国語)より良い選びのために広告の着眼点は何か。 (数学)多数決はいつでも民意を反映した「公平な」投票方法であるのか？ (理科) 高レベル放射性廃棄物の地層処分場所の決定における「平等と公平」は何か？ (音楽) 著作権における公正な利用とは？ (保健体育) リレーにおける「平等と公平」は何か？</p>

2時間目	みんなが楽しめるリレーのチームとルール作り ・平等なチームとルール ・公平なチームとルール	【事実的な問い】から【議論の余地のある問い】へ ・リレーを楽しむために、「平等」や「公平」なチームやルールはどのようにつくればよいか？
3時間目	2時間目に提案したチームおよびルールに従って、リレー実践	
4時間目	リレー実践を経て、「平等と公平」、さらには「公正・公平・社会正義」について考える。	【議論の余地のある問い】から【概念的な問い】へ ・公平とは？平等とは？

2-3. 各教科のトピックについて

単元1時間目に提示した「公正・公平・社会正義」に関連する各教科からのトピックの内容を以下に示す。各教科のトピックからスタートする展開は、「公正・公平・社会正義」を捉える構図の共通性を見出すヒントとなることをねらった。

(国語) 私たちは身の回りにある広告の影響を受けている。正しい判断ができる「かしこい消費者」になるために、批判的思考力と多角的な「ものの見方」を育てていきたい。広告は様々な技術としかけによって作られる。広告のメッセージは「ことば」の字体や句読点の使い方によって、「画像」の大きさや角度、配色によって意図が変えられる。多角的な観点から正しい判断ができるよう考察を深めていく。

(数学) 日本では選挙であれ学校の決め事であれ、ある集団が選択肢から1つのものを決める際には多数決がとられることが多い。多数決は決定に関わる全ての人が1票を投じられるということで「平等な」決め方であると認識されていると考えられるが、民意をうまく反映しているとは必ずしも言い切れない。その問題点の1つに、似たような候補に対する票割れを起こしやすいということがある。言い換えれば、投票の際に2番手以下に対する思いは無視されてしまうのである。それで本当に「公平な」決め方と言えるのか。ではどのような決め方ならばより民意を反映できるのか。民意を数値化することで考えていく。

(理科) 日本では、原子力発電に伴い発生する使用済み核燃料を再処理し、ウラン・プルトニウムを回収した後に生じる高レベル放射性廃棄物を冷却のため貯蔵、管理した上で、地下300m以深の地層に埋設処分する方針が決まっている。しかし、その地層処分の場所が未だ決まっていない。この状況は、NIMBY問題として捉えられることもある。国内の社会的問題として、平等にまたは公平に処分地を決めていく方法はあるのだろうか。

(音楽) 音楽科学習指導要領^{iv)}の「第4章指導計画の作成と内容の取扱い 2内容の取扱いと指導上の配慮事項」の中でも記載されている通り、「著作物及びそれらの著作者の創造性を尊重する態度の形成を図る」と示されおり、「態度の形成が音楽文化の継承、発展、創造を支える」ことが重要視されている。今回は著作権についての基礎的な知識を学習から始め、著作権が

あることによって著作者にどのようなメリットが生まれるのかを知る。また、著作権がなくなった際に生じるデメリットにもふれつつ、音楽の公正な利用がもたらす効果や影響について考える。

(保健体育) 運動やスポーツの場面においては、体力や技能の程度、性別や障害の有無等、一人一人の違いが現れる。その違いを認め合おうとしながら、公正に取り組むことを考える。運動における競争や協働の経験を通して、自己の役割を果たすことや自己の最善を尽くすことに全力で取り組み、運動やスポーツの多様な楽しみ方を共有していくにはどのような「ものの見方」が必要か、考えていく。

2-4. リレーのチームやルール作りにおける「平等と公平」について

本単元において、「平等と公平」を具体的に考える題材として、保健体育としてのトピックに焦点化した。ここで生徒が議論するのは、「みんなが楽しむためのリレーのチーム作りとルール作り」である。

クラスを2チームに分け、「平等」なチームおよびルールで実践するリレーと、「公平」なチームとルールで実践するリレーについて議論した。図2における平等と公平を生徒とも共有した上で、リレーの目的が「みんなが楽しむこと」であることを提示する。図2における「平等(Equality)」は、全員が同じ高さの箱に乗っており、同じモノが与えられることを平等としている。一方で、「公平(Equity)」は与えられた箱の高さはそれぞれ異なるが、野球を観戦できる視点の位置は全員同じである。これを、リレー競技に置き換えて考えることになり、例えば、以下のような意見が出た。

例1) チーム分けについて

- ・くじ引きや出席番号順でチームを構成するのが「平等」
- ・両チームとも同じ人数であることが「平等」
- ・50m走のタイムの平均が同じになるようにチーム分けをするのが「公平」

例2) ルールについて

- ・全員が同じ距離を走るのが「平等」
- ・50m走のタイムによって、走る距離を変えるのが「公平」
- ・スタートまでの条件が同じであることが「平等」であり、結果が同じであることが「公平」
- ・チームが走者の特徴を考慮した上で距離を調整できるように、テイクオーバーゾーンを設けるのが「公平」

例えば、タイムに応じて走る距離を変え「遅い人は皆と同じ距離を走らなくてよい」としたら平等とは言えないのではないか。一方で、「タイムに応じて走る距離を変える」というのは個人に対する公平と言えそうだが、「走る時間を同じにしている」と見れば平等とも考えることができるのではないか。このような議論もあった。

単元2時間目に実施される議論は、単にチームやルールを決めるための話し合いではない。「平等」と「公平」の捉え方が、ものの見方により変化することに気付き、「平等と公平」の考え方について議論することになる。この考え方に1つの答えは存在しない。それは、各教科のトピックで学んだ事例における構図からもわかるであろう。ここで生徒たちには、【事実的な問い】と【議論の余地の

ある問い】とを往還しながら、最適解を見出してほしいと願い、教員はそれをサポートする立場として貢献する。

2-5. リレーの実践

各クラスで議論したチームとルールで、実際にリレーを実践した。以下に生徒の振り返りの記述を抜粋する。

- ・公平に関しては、結構良い感じに同じような速さだったけれど、バトンパスは両方とも少し誤差を与えるものでした。走っている途中は、公平の方は近い秒数の人もいれば、違うものもあった。平等の方は、近い方が多かった気がするが、走っているときは、あまり何も大きな差は感じなかった。どちらも結局差はついてしまった。
- ・今日はリレーを走るとき、「平等」や「公平」にしたければ、その人の調子や準備体操までの行い方をそろえないといけないかもしれないという案が出ました。でも、それは不可能な面があったり、時間がかかったり、真剣に捉えすぎでしまいリレーの楽しさもなくなってしまうと考えました。リレーなどのゲームの中で、「平等」と「公平」は、ある程度まで考えることが大切だと感じました。

本単元の特徴の1つは、生徒の考えたチームとルールでリレーを実践したことである。2時間目の議論を実際に経験することで、また「ものの見方」は変わるのではないか。飛躍しすぎかもしれないが、当事者性を意識することにつながる。「公平・公正・社会正義」に関連する話題に、外野から客観的な意見を言うばかりではなく、問題の内側から考え、その事象を捉え直す経験をしてほしいと考えた。

3節 公開授業

2022年11月26日(土)に開催された本校の公開研究会にて、本単元の4時間目の授業を公開し、研究協議を行った。公開授業の学習展開は以下の表2に示す通りである。

表2 公開授業における展開

導入	<p>前時のリレー実践における「平等と公平」について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・リレー実践を振り返って、クラスで決めたチームやルールの妥当性を考える。 ・グループ内で意見交換 → クラス全体で共有
展開1	<p>重要概念「ものの見方」の視点から考える平等と公平について</p> <p><u>探究の問い：「平等」とは何か？「公平」とは何か？</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・リレー実践を踏まえて、各グループで具体的なテーマを設定し、平等と公平について考える。 ・グループ内で意見交換 → クラス全体で共有
展開2	<p>Stella Young による TED スピーチ「健常者が障害者を特別視することのない公平な共生社会」を通して、立場の違いによる「公平」の捉え方の違いについて改めて考え、重要概念「ものの見方」につなげる。</p>

振り返り	これまでの学習から感じたこと・考えたことを振り返る。 また、この学習で得た「ものの見方」を自身の今後はどう活かしていくかについて述べる。
------	---

導入として整理した前時のリレー実践における「平等と公平」では、それぞれについて以下の表3に示す感想や意見が挙げられた。

表3 リレー実践後の感想や意見

平等	公平
<ul style="list-style-type: none"> ・一度差が開いてしまったらそのまま差が縮まらない。 ・人数だけが一緒だから、大差が生まれて平等だとあまり感じられなかった。 ・どこまで平等にこだわるのか、あいまいだった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・勝負に、より適している ・合計タイムが同じだったから接戦だった。見ててもやっても面白い。 ・決め方は良かったが、不確定要素があるため公平にはならなかった。 ・もし本当に公平なら同時にゴールするはずである。 ・一人当たりの負荷は一緒に見えた

生徒の意見や感想に多く含まれるように、実施に走ってみるとバトンミスや転倒などがあり、想定通りにはいかない結果となった。「平等」になることを想定して決めたチームやルール、「公平」になると想定して決めたチームやルールが、実施に走ってみるとその通りには働かないことを学んだと多くの生徒が振り返りで言及していた。

以上を踏まえて展開1における【概念的な問い】について議論した。この概念的な問いにおいては、リレー実践に限らず、他の事例からもアプローチするように促した。表4にその具体例を示す。

表4 平等と公平の事例

平等	⇔	公平
・全員に同じ量の食べ物を与える	⇔	・その人に合った適切な量の食べ物を与える
・女性としてオリンピックに出場する権利を与える	⇔	・体格に合ったレベル同士で競う
・みんなに同じ教科書を与え、同じ授業を行う	⇔	・習熟度別で授業を行う
・補助金や消費税	⇔	・所得税
・バスの運賃(乗った距離に関係なく一律同額)	⇔	・電車の運賃(乗った距離によって値段が変わる)

これらの事例から、「平等」はみんなに同じものを与えるが、「公平」は与えた結果が同じになるようにする、「平等」は特性を考慮しないが、「公平」は特性を考慮している、「平等」は完全な再現がしやすい一通りだが、「公平」は視点によって何通りにも変わるなどの考えが生徒から生み出された。

3章 実践を通して見えてきた成果と課題

1節 道徳に概念的理解学習を持ち込むことの意義

道徳学習の目標は、学習指導要領にも示される通り「物事を広い視野から多面的・多角的に考える」である。道徳授業で具体的なトピックを扱いながら、中学生としての経験を重ねていくことが、トピックと概念の相互の関連を捉え直したり、さらに発展させたりすることにつながる。概念的理解学習の導入は、個別の事例だけでなく物事を広い視野から捉えることにつながる。本授業研究で扱ったトピックは「平等と公平」であり、リレー実践やその他の事例考察を通じて中学生の視点から「平等と公平」の在り方を議論した。その過程の中で、どの立場で「平等と公平」を考えればよいのかという「ものの見方」の概念が1つの課題となった。具体的なトピックの提供は、議論を活発にさせる。その活発な議論を扱ったトピック固有のものにするのではなく、転移させるために概念的学習が必要なのではないか。

2節 道徳に概念的理解をどのように持ち込むか

本授業研究で行った方法は、図3に示すように生徒の思考を促す探究の問いを3段階に設定し、具体的なものからより抽象度を上げていくことによって概念的な思考へ導くというものであった。このような方法は、複数教科の教員による協働設計であること、1コマの授業ではなく4時間かけた単元として実施したことによ

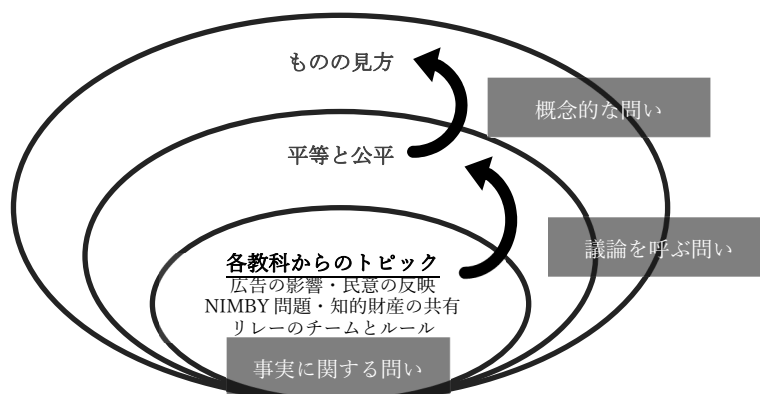


図3 概念的理解のプロセス

り実現できた方法である。学習指導要領で設定された内容項目は22項目あり、1つの内容項目に複数時間かけることは可能であるが、年間授業計画にどのように組み込むかが課題となる。

また、IBの枠組みを活用するのであれば、学際的単元としての実施も考えられる。学際的単元では、知識や情報が増えるにつれ、批判的思考を用いる人は実社会の問題、アイデア、課題を理解し、社会に肯定的な変化をもたらす行動をとるために学問分野ごとのものの見方をうまく統合していく必要があると考えられている。この考え方は、本授業研究でねらったものと合致しているので、学際的単元としての枠組みの中で道徳授業を実践することも1つの方法であると考えられる。ただし、学際的単元の実施においては、評価課題の実施が必要となるため、本単元において「評価」「統合」「振り返り」の観点で学習評価することが課題となる。

3節 IBの重要概念「ものの見方」を用いたことで期待される効果

本授業研究では、道徳教育にIBプログラムの単元設計の枠組みを活用し、重要概念を「ものの見方」と設定した。この重要概念の設定が、生徒にどのような効果があったかのだろうか。単元を通じた振り返りにおける生徒の記述の抜粋を以下に示す。

- ・平等と公平は必ずしも形あるもの(お金など)に対してではなく、形ない心に対してのものでもあるという考え方を手に入れた。
- ・現実世界で「公平」「平等」を実現することはあり得ないくらいむずかしいのではないかと思った。
- ・公平は誰もが同じ目線になれるのが良いと思っていたが、そうなるためには足りない能力に目を向けることになる。社会的にそういった人々への注目が集まれば、いくら公平を目指しても特別視や不公平といった状況を作ってしまう。そのため平等や公平について考えるとき、対象を特別なものとしていないか確認したい。
- ・事実から本人の気持ちを予想せず、きちんと聞くことが大事だと思った。全員の声を聞くことは不可能なので、傾向を考慮して、それでも意見が言えるような環境を作る必要があると思った。
- ・リレーのチームやルール決めや別の事例を考えてみて、複数の人が関わるような大きな概念は定義しづらいと感じた。だから、なるべく平等や公平に近づくためにも関わっている多くの人がそれをどう思っているかを聞くことが大切だと思った。
- ・「平等」はゴールまでの過程が一緒で、「公平」はゴールに着く時が一緒だと考えたので両立できるというのは、そもそもスタート時の条件が完全一致で身分等に差がないということになる。でも不可能なので、だれも苦しまない仕組みって何なのだろうと思った。

本単元を通じて、生徒は「平等と公平」という文脈の中で様々な場面を想定して考えた。生徒の振り返りの中でも、目線、対象、本人などのものの見方(視点)に関連したキーワードが使用されるように、ある1つの事象に対して異なるものの見方が存在し、それがその事象を複雑にしていることに気付いている。平等とは何か、公平とは何かを考える過程の中で、ものの見方の多様性を獲得していることが、重要概念設定の効果であろう。この学習経験が、他の文脈においても発揮され、さらに様々なものの見方を身に付けること、学習領域を横断してものの見方を比較することなど、概念理解の深化を今後期待する。

参考文献

- i 中学校学習指導要領(平成29年告示)解説「特別の教科 道徳編」, 文部科学省, 平成29年7月
- ii 非営利教育財団 国際バカロレア機構, 「MYP: 原則から実践へ」, 2014年9月
- iii Interaction Institute for Social Change (Angus Maguire 作) <https://interactioninstitute.org/illustrating-equality-vs-equity/> 最終閲覧日 2023年1月26日
- iv 中学校学習指導要領(平成29年告示)解説 音楽編, 文部科学省, 平成29年7月
- v 非営利教育財団 国際バカロレア機構, 「MYPにおける学際的な指導と学習」, 2021年2月

Considering Equality and Equity from the Standpoint of a Key Concept "Perspectives"

–Moral Education Proposed from a Viewpoint of Interdisciplinary Integration of Subjects–

Abstract

In designing a collaborative moral education class, we utilized the unit design framework of the International Baccalaureate to design a unit that promotes conceptual understanding by setting a key concept and inquiry questions. By developing from factual questions to debatable questions, and from debatable questions to conceptual questions, the students actualized "the moral education class through thinking and discussing" as indicated in the Japanese Courses of Study. The students' active discussions and their reflections showed that they were thinking about equality and equity from various aspects and perspectives.